



TITLE:

中國古代における鐵製農具の生産と流通

AUTHOR(S):

大櫛, 敦弘

CITATION:

大櫛, 敦弘. 中國古代における鐵製農具の生産と流通. 東洋史研究 1991, 49(4): 625-643

ISSUE DATE:

1991-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154358>

RIGHT:

東洋史研究

第四十九卷 第四號 平成三年三月發行

中國古代における鐵製農具の生産と流通

大 楡 敦 弘

一 問題のありか

二 鐵製農具をめぐる状況の變化

(1) 民間大製鐵業者と鐵專賣制

(2) 重 要 性

(3) 自 給 性

三 戰國前漢期における鐵製農具の生産と流通

(1) 文 獻 史 料

(2) 製 鐵 遺 跡

四 「後漢期以降」における鐵製農具の生産と流通

(1) 鐵素材の流通と貯藏

(2) 鐵素材の搬入による非鑛產地での鐵製農具の生産

五 終 章

一 問題のありか

中國では、およそ春秋戰國期より農具の鐵製化が始まった。その影響について評價は必ずしも確定してはいないが、以後、主要な生産手段となったこの鐵製農具がどのような形で生産され供給されていたのかという問題は、その時代の社會や國家支配のあり方にも關わる重要なものであると思われる。

この問題について従來の研究では、次のような理解がなされてきた。すなわち鐵製農具の生産が當時、鑛石や木炭など主要原料の産地に限定されていたために、それを自給することのできない一般村落の農民は「外部からの供給」に全面的に依存せざるをえず、そこに非常に廣範な、そして供給者側が壓倒的に優位にあるような流通圏が成立していた——このような理解のもと、さらに民間大製鐵業者や鐵專賣制の問題⁽²⁾、あるいは集權的國家の形成が論じられてきたのである。

こうした鐵製農具の生産・流通構造をめぐる理解は、もとより本稿での考察の基礎となるものであるが、そこで對象とされているのがもっぱら民間大製鐵業者や鐵專賣制の存在した戰國前漢期のみに限られている點に、なお検討の餘地があるものと思われる。なぜならおよそ宋代以前の時期は、農具製作がおおむね「鑄造」によるものであったという「大枠」⁽⁴⁾において共通するものであるにもかかわらず、そのうちの後漢以降およそ隋唐までの時期におけるこうした問題については從來ほとんど顧みられていないからであり、しかもこの「後漢以降」の時期には、前代のような民間大製鐵業者や鐵專賣制の存在がもはや見られなくなっているからである。このことは後漢期以降、鐵製農具の生産・流通構造に——前述の「大枠」の範圍内において——何らかの變化があったことを示すものではなく、むしろそのような變化が認められるのであれば、當然それは社會や國家支配のあり方にも何ほどの影響を及ぼすものであったと考えられるのである。以上より本稿では、後漢期以降、鐵製農具の生産・流通構造に何らかの變化があったとの見通しのもと考察を進めてゆく。まずはそこでの變化の様相について確認をした上で、前後それぞれの時期における生産と流通のあり方について検討を加え、さらにはその社會や國家支配との關連についても説き及んでゆくこととしたい。

二 鐵製農具をめぐる狀況の變化

戰國前漢期から後漢以降の時期にかけては、先にふれた民間大製鐵業者や鐵專賣制の問題をはじめとして、鐵製農具をめぐる諸狀況にいくつかの變化が認められる。本章ではそれらを、(1)民間大製鐵業者と鐵專賣制、(2)重要性、(3)自給性、

のおよそ三點に整理して検討を加え、その背後にある生産・流通構造の變化について確認をする。なおそれに際してその變化の様相をより明確にするために、專賣制などにおいて「鐵」と並稱されることの多い「鹽」の事例を對比して取り上げることとしたい。

(1) 民間大製鐵業者と鐵專賣制

鐵製農具の生産と流通に關して、戰國から漢初にかけては民間の大製鐵業者が活躍し、續く前漢後半にはそれを排除する形で國家による鐵專賣制が施行されていたことは周知の通りであるが、後漢期以降になるとその様相は一變する。⁽⁵⁾

まず民間の大製鐵業者の活動が影をひそめてしまう。流通部門においても、「鹽や穀物」を扱う北魏の劉實のような例は見られるにもかかわらず、「鐵器」を扱うような大商人の存在は確認されなくなるのである。⁽⁶⁾

一方、鐵專賣制についても——この時期も國家による鐵製農具の生産は繼續され、さらにはごく局地的な生産の統制も行われてはいるもの⁽⁷⁾——後漢初の一時期を別にすれば、かつてのような強力な專賣制は施行されなくなっている。この點、後漢期以降も國家の強い統制下にあり續け、とくに唐代後半にはその專賣收入が國家歳入の過半を占めるような鹽の場合とは際立って對照的なものといえるであろう。ちなみに後の五代や北宋期において、何度かこの制度の復活が試みられているが、いずれも定着することなく終わっている。⁽¹⁰⁾

このように後漢期以降になると、かつて鐵製農具の生産・流通の代表的な擔い手であった民間大製鐵業者や鐵專賣制は見られなくなってしまうのである。

(2) 重 要 性

戰國前漢期には「鐵器は農夫の死士なり」⁽¹¹⁾（『鹽鐵論』禁耕）、「農は天下の大業なり、鐵器は民の大用なり」（『同』水旱）、

「鐵は田農の本」(『漢書』卷二四食貨志下、王莽の詔)など、鐵製農具が農民の生活においていかに不可缺で重要なものであるかを強調した記事がいくつも見られる。ところがこうした記事も、後漢期以降になるとまったく確認できなくなるのである。このことは、ここに挙げた王莽の詔で同様に「鹽は食有の將」とされている鹽が、後漢期以降にも引き續き「鹽は食の急なるもの」(『後漢書』列傳卷三三朱暉傳)、「それ鹽は國の大寶なり」(『三國志』魏書卷二一衛觐傳)などと、その重要性を強調されているのとはやはり對照的なものであるといえるであろう。

これら鐵や鹽の重要性を強調する史料は、實はいずれも專賣制との關連において述べられているものであり、その意味でここでの變化が先に見た專賣制のそれと同様な展開を示しているのはむしろ當然なことなのではあるが、それではこうした變化が見られる背景にはどのような事情が存していたのであろうか。この點で注目されるのが次の「自給性」の問題である。

(3) 自 給 性

王莽の詔では、先に引用した如く、鐵や鹽などが農民の生活にとっていかに重要なものであるかを強調した後、

これらは一般の家庭で自給できる代物ではなく、どうしても市場など外部からの供給に依存することになるがため、

どれほど法外な値段であっても買わないわけにはいかない。豪民や大商人は、まさにそこにつけこんで民衆から搾りとるのである。⁽¹³⁾

として、それゆえ「商人の搾取から農民たちを守るべく、鐵や鹽などを國家の統制下に置く」ことが述べられている。ここで注目されるのは、鐵製農具(や鹽)は一般の農民には自給することのできないものであるとの認識がなされていることであり、かつそのことが專賣制の實施や大商人の活躍の前提として明確に指摘されていることである。そしてさらに『孟子』滕文公章句上の「君民並耕」の獨自な自給自足論を唱える許行學派を批判した)かの著名な問答において「鐵製農具は

自給しうるものではなく、外部からの供給に仰ぐものである」との認識が雙方の共通の前提となっていることをもあわせて考えるならば、こうした認識は戰國前漢期においては一般的なものであったと見ることができであろう。

ところが後漢期以降になると、たとえば『顔氏家訓』治家篇の、自給自足の理想的な莊園像を描いたこれまた著名な部分に

非常にうまく切り盛りすれば、門を閉じたその中だけで必要物資はみな揃うものなのであり、そこでどうしてもまかない切れないものを舉げるとすれば、せいぜい鹽井くらいということになるであらう。⁽¹⁴⁾

と見えているが、ここで自給不可能なものとして挙げられているのは「鹽井」の語で示される鹽のみなのであって、その限りで鐵製農具は自給可能なものと考えられているらしいのである。このことは「菽麥を區種し、竹葉木實を採りて鹽に實え、以て自ら供⁽¹⁵⁾」していた隱者郭文の場合についても同様であらう。このように後漢期以降では、鐵製農具が自給できないものであるとの認識はもはや見られなくなっているのである。

以上、戰國前漢期から後漢以降の時期にかけての鐵製農具をめぐる諸状況の變化を、(1)民間大製鐵業者と鐵專賣制、(2)重要性、(3)自給性、の三點について確認してきた。前出の王莽の詔などから見て、これらの點は互いに關連しあうものであると思われるが、この中でも本稿での考察においてとくに注目されるのは「自給性」の問題であらう。すなわち序章においてもふれたように、鐵製農具の生産と流通をめぐる從來の理解では、(生産地の偏在による一般村落レベルでの)「自給性の缺如」という點が重要な前提とされているわけであり、まさにこの點において、ここまでに見てきた諸點が生産や流通の問題とつながってくるのである。そしてこうした「自給性の缺如」を前提とする生産・流通構造をめぐる理解が、戰國前漢期については適合するものの、後漢期以降については成り立ち難いものであることは、ここまでの検討からも明らかであらう。後漢期以降に鐵製農具の「自給性の缺如」が解消してしまう以上、それを前提とした生産・流通構造にも大きな變化が生じたものと考えざるをえないのである。この時期、民間大製鐵業者の活躍や鐵專賣制の施行が見られなくなっ

たり、鐵製農具の重要性がとくに強調されなくなるのも、こうした生産・流通構造の變化に連動するものといえるであらう。

このように、戰國前漢期と後漢期以降とは、鐵製農具の生産・流通構造は異なるものであったと思われる。そこで以下に、それぞれの時期における鐵製農具の生産と流通の様相について、この「自給性」の問題を中心に見てゆくこととしたい。

三 戰國前漢期における鐵製農具の生産と流通

すでに述べてきたように、この時期における鐵製農具の生産・流通構造は、一般村落レベルでの「自給性の缺如」を重要な前提とするものであり、それはさらに鑛石や木炭など主要原料の産地に「生産の場が限定」されていたことによるものであったとされている。當時における農具の生産は、ごく大まかに言って、鑛石を採掘する「採鑛」、その鑛石から鐵を抽出する「製鐵」、さらに（鑄造の場合）鐵を溶かして鑄型に流し込む「鐵器製作」の諸過程よりなるものであるが、本章では、(1)文獻史料および(2)製鐵遺跡の二點より、こうした「生産と立地」の關係について檢證し、あわせて後漢期以降の變化についての考察の手がかりを求めてゆくこととしたい。

(1) 文獻史料

まず、戰國から漢初にかけて活躍した民間の大製鐵業者の例について見てみると、蜀の卓氏が「鐵山に即きて鼓鑄」したとあり、また一般に彼らが「鐵石を采りて鼓鑄」し、かつ「深山窮澤の中に聚ま」⁽¹⁷⁾っていたとされているように、そこではいずれも鑛産地において生産が行われていたこと、さらにそれが採鑛から鐵器製作まで一貫して行われるものであったことが知られる。これは前漢後半期に施行された鐵專賣制の場合についても同様であり、そのことは專賣制の實態につ

いて述べた「鹽冶の處、大倣みな山川に依り、鐵炭に近ければ、その勢みな遠くして作は劇(じとまづい)」という記事や、『管子』輕重乙篇に見える「山木を斷ち、山鐵を鼓す」という官營製鐵の構想などからも確認されるであろう。

このように、當時の文獻史料では、民間の大製鐵業者も鐵專賣制も、鐵製農具の生産はともに鑛石や木炭の産地において、採鑛から鐵器製作まで一貫して行うものであったとされているのである。

(2) 製鐵遺跡

戰國から漢代にかけては製鐵遺跡の報告が多く見られ、そこでの（農具を中心とする）「鐵器」生産の具體相もかなり明らかにされている。そこでまず、本稿での考察と關わる限りにおいてこれら製鐵遺跡をめぐる先行業績を一瞥してみると、當時の製鐵遺跡には、まず「機能」⁽¹⁹⁾の點では採鑛から鐵器製作まで一貫したものと、採鑛・製鐵と鐵器製作とが分業化しているもの、さらに「立地」⁽²⁰⁾の點からは都市（城市）に設置されたものと、原料の豊富な深山に設置されたもの、といったタイプの存在することが指摘されてきた。これら機能・立地の二點を總合する形で井口喜晴氏は、當時の鐵器生産について、深山において採鑛から鐵器製作まで一貫して行うもののほかに、深山では採鑛・製鍊までを行い、そこで製作された鐵素材^{（イゴット）}の供給を受けて、都市で鐵器製作を行うような分業關係の存在を想定されている⁽²¹⁾。これについてはさらに、一貫作業から分業化へ——という時代による變化を指摘する見解もある一方で、分業の展開には否定的な見解も出されている⁽²²⁾。

これらの先行業績のうち、本稿での考察においてとくに重要な意義をもつのは鐵器生産における分業化傾向、わけても鐵素材の問題であろう。なぜなら、このような分業構造のもとでは、鐵素材の供給を受けることによって、鑛産地でなくとも鐵器製作は可能となるわけであり、その意味でこれはまさに、（鑛産地の制約）による一般村落レベルでの「自給性の缺如」を前提とした）鐵製農具の生産・流通構造が變化してゆく上での重要な契機となるものであったと考えられるからである。

製鐵遺跡出土遺物表

所 在	時 代	採鑛・製鐵	鐵素材	鑄造	報 告
〔深山型〕					
1. 河北省興隆縣壽王墳	戰 國	採鑛址, 鑛石		鑄型	考56—1
2. 河南省西平縣酒店	戰國～漢代	鑛石			學78—1
3. 河南省桐柏縣毛集	戰國～漢代	採鑛址, 鑛石			華88—4
4. 山東省萊蕪縣牛泉	前漢前期			鑄型	文77—7
5. 河南省鞏縣鐵生溝	前漢中晚～後後初期	採鑛址, 鑛石	鐵板	鑄型	學85—2
6. 河南省新安縣上孤灯	前漢晚期～新代	鐵鑛砂		鑄型	華88—2
7. 河南省南召縣草店	漢 代	鑛石			文57—6
8. 河南省鶴壁市鹿樓	漢 代	鑛石		鑄型	考63—10
9. 河南省桐柏縣張畝	後 漢	採鑛址, 鑛粉	鐵板・錠		學78—1
10. 江蘇省利國驛	後 漢	採鑛址, 鑛石			文60—4
11. 河南省滎池縣驛東南	後漢～南北朝	(鐵材鑄型)	鐵材	鑄型	文76—8
12. 安徽省繁昌縣黃澍	唐 ～ 宋	採鑛址			文59—7
13. 河北省邢臺市綦村	宋 代	採鑛址, 鑛石			文57—6
14. 河北省邢臺市朱莊	宋 代		鐵板		考59—7
15. 河南省南召縣楊樹溝	宋 代	採鑛址			中89—3
〔城市型〕					
16. 柏陽城(河北省)	戰 國			鑄型	學75—1
17. 靈壽城(河北省)	戰國中晚期			鑄型	集 5
18. 下都城(河北省)	戰國中晚期		鐵板	鑄型	集 2
19. 鄭韓城(河南省)	戰 國 晚 期			鑄型	叢 3
20. 東平陵城(山東省)	春秋～秦漢	鑛石, 鐵砂			考55—4
21. 雍城(陝西省)	戰國～前漢			鑄型	與80—4
22. 陽城(河南省)	戰國～漢代	附近に鑛山		鑄型	文77—12
23. 邯鄲城(河北省)	戰國～漢代	鑛石		鑄型	考80—2
24. 陝西省韓城縣芝川鎮	前 漢			鑄型	與83—4
25. 滎陽城(河南省)	前漢中晚期～後漢	鑛石	鐵板	鑄型	文78—2
26. 宛城(河南省)	前漢中～後漢晚期		鐵板	鑄型	學78—1
27. 薛城(山東省)	漢 代	鑛石	鐵料	鑄型	考65—12
28. 河南省魯山縣望城崗	漢 代	鑛石		鑄型	學78—1
29. 朗陵城(河南省)	漢 代	採鑛址, 鑛石			與87—5
30. 溫縣城(河南省)	後漢早期		鐵條	鑄型	注(24)
31. 安國城(河南省)	後漢中後期		(鑄型)	鑄型	考82—3
32. 同安城(福建省)	宋 ・ 明	鐵砂			文59—2

そこで以下、こうした點を中心として、製鐵遺跡の問題についてあらためて検討してみることとしたい。

右頁の「製鐵遺跡出土遺物表」は、このような分業化傾向の存在を確認するべく、各製鐵遺跡のデータを「立地」・「時代」・「機能」の三點についてまとめたものである。⁽²⁴⁾まずその立地によって全體を「深山型」と「城市型」とに大別し、さらにそのそれぞれについて各遺跡を時代順に配列した。また各遺跡の機能については、そこでの出土遺物の中から、採鑛・製鐵部門の存在を示す採鑛址や鑛石、鑄造（鐵器製作）部門の鑄型、および分業の問題との関連で注目される鐵素材それぞれの出土狀況を表示してある。もとよりこれら遺物の出土狀況は、ある程度偶然性に左右されるものであるから、それが當時の實態に必ずしもそのまま結びつくものではないことには留意しておく必要があるが、しかしここから大よその傾向をうかがうことは可能であろう。

そこでこの表を見てみると、まず全體として、深山型の遺跡には採鑛址や鑛石が、そして城市型の遺跡には鑄型がそれぞれ多く發見されており、「深山での採鑛・製鐵、城市での鑄造」といった大まかな傾向が確認される。もともとこれらの出土狀況には、時代による變化はとくに認められないかのようなのであるが、（一）分業化が進んだ場合でも、深山における鑄造や城市での採鑛・製鍊が完全に跡を絶ってしまうとは限らない、（二）長期間稼働していた製鐵遺跡の場合、そこで完全な分業化が實現したとしても、かつて一貫作業もなされていたのであれば、その遺跡からは鑛石も鑄型も出土することとなる——といった事情も考慮に入れるならば、このことは必ずしも鐵器生産における分業化傾向の存在を否定するものではないであろう。

分業の問題との関連で注目されるのは、むしろ鐵素材の出土狀況である。なぜなら鐵素材は、夾雜物を多く含む鑛石に比較して、採算・効率の點ではるかに廣範圍での大量輸送が可能であるため、非鑛産地での鐵器製作、ひいては分業構造にとつての不可欠の要素なのであり、したがってその出土狀況から逆に、分業構造の展開をある程度うかがうことができるものと考えられるからである。そこでこの鐵素材の出土狀況であるが、表によれば、18下都城に戰國中晩期の例が一つ

あるが、これは「兵器作坊」というやや特殊な事例であり、⁽²⁵⁾その他はいずれも前漢後半期以降の出土であることが知られるであろう。このことから、およそこの前漢後半期ごろより、鐵器生産における分業化傾向が見られるものと想定されるのである。

以上、戦国前漢期における鐵製農具の生産と流通の様相について、(1)文獻史料、(2)製鐵遺跡の二點より、とくに「生産と立地」の關係を中心として検討してきた。その結果、文獻史料では、鑛産地において採鑛より鐵器製作までの作業が一貫して行われるとされているのに對して、製鐵遺跡の検討からは、前漢後半期ごろより、鑛産地以外でも鐵器製作が可能であるような分業化傾向の存在が想定されるのであった。

さて、ここで分業化傾向の存在が想定される前漢後半期とは、まさに鐵專賣制が施行されていた時期にあたる。國家による一元的な統制のもと、全國規模で生産が運営されていたことを考えるならば、確かに專賣制はこうした分業化傾向を促進する契機となったものと思われるが、しかし一方では、それによつて分業化が全面的に展開し、いかなる所でも鐵器製作が可能となったわけではない點にも留意しなければならない。實際、この制度のもとでの農具をはじめとする鐵器の生産は、全國でも五十箇所に満たない鐵官、あるいは縣ごとに置かれた小鐵官のレベルに止まるものであつて、それ以外での生産は刑罰をもつて禁止されていたのであつた。⁽²⁶⁾國家にとつて、專賣制が營利を目的とするものである以上、一般村落レベルでの「自給性の缺如」を前提とする、供給者側が壓倒的に優位にあるような生産・流通構造を崩すような分業化の全面的な展開は、當然抑止されねばならなかつたのである。このように鐵專賣制のもとでの鐵製農具の生産・流通構造は、部分的には分業化傾向を取り入れながらも、一般村落での「自給性の缺如」を前提とした、かの生産・流通構造の大枠は溫存するものであつたといえよう。そしてその限りでは、この鐵專賣制の施行期である前漢後半期をも含めて、戦国前漢期はまさに「生産の場が限定」されていた時期であつたといえるのである。

ところで、ここまでに見てきた分業構造は、鐵素材の流通を媒介として生産の過程を分離し、原料の豊富な鑛産地にて

もっぱら採鑛・製鍊を行い、一方で各地の地域的特性に應じた鐵器製作を行うというものであるが、鑛產地での一貫生産の場合と比べて、このように合理的かつ複雑な生産のシステムが出現してきた背景には、おそらく生産の量的な擴大があったものと思われる。とすれば、農具をはじめとする鐵器使用の普及に伴って、分業化傾向は不可避なものとなっていたであろう。前漢後半期に施行された鐵專賣制は、基本的には、こうしたいわば「自然の勢い」を權力的に押さえ込もうとするものであった。武帝の鐵專賣制施行より、鹽鐵會議、元帝期の一時的⁽²⁷⁾中斷や王莽の專賣制などといった、この制度をめぐる跋行的展開には、分業化の展開とそれを抑止しようとする力とのせめぎあいを見ることができであろう。しかし最終的には、こうした流れを押さえきえることはできず、後漢初期のごく短期間の施行を最後として、以後、本格的な鐵專賣制の施行が見られなくなったことは、すでに述べた通りである。もはや分業化の全面的展開を阻止する要因は消え、それによって、一般村落レベルでの「自給性の缺如」を前提とするそれに代わり、新たな鐵製農具の生産・流通構造が出現する。本章では、その後漢期以降の様相について検討することとした。

四 「後漢期以降」における鐵製農具の生産と流通

ここまでの考察からすると、後漢期以降においては分業化が全面的に展開し、鐵素材の廣範な流通を受けて、非鑛產地の一般村落レベルでも鐵製農具の鑄造がごく普通に行われるようになったものと推測されるが、本章ではこうした見通しについて、(1)鐵素材の流通と貯藏、(2)鐵素材の搬入による非鑛產地での鐵製農具の生産(鑄造)、の二點より検証することとした。

(1) 鐵素材の流通と貯藏

『晉書』卷三十三石苞傳では、三國時代、渤海南皮縣の役人であったころの石苞が、かつて出張で鄴に赴いた際、用向き

が中々片附かず、「鐵を鄴市に販」ったことを傳える。これは市場における鐵素材流通を示す事例であるが、ここでもうひとつ注目されるのは、『三國志』卷四高貴鄉公紀甘露五年五月戊申條の注に引く『世語』で同じ部分が「鐵を長安に鬻ぐ」となっていることである。このような異傳が見られることは、當時、こうした鐵素材の賣買が、鄴でも長安でも一般に行われうるものであったことを示すものといえるであろう。

時代が降って、吐魯番文書中、およそ七世紀初期のものとしてされる「高昌傳錢買鑠鐵、調鐵供用帳」⁽²⁸⁾では、高昌國の官府がそれぞれ「錢肆文で鑠鐵肆斤」、「錢參文で鑠鐵參斤」、「錢貳文で鑠鐵貳斤」、「(錢)肆文で調鐵壹斤伍(兩)」を買上げたことが記されている。「鑠鐵」や「調鐵」が具體的にどのようなものであるかは明らかではないが、それが「斤」單位で賣買されていることから、鐵素材としての性格をもつことは明らかであろう。また、殘存しているのは「銅」と「鑠」のみであるが、唐天寶二(七四三)年の交河郡の市場公定價格表にも鐵素材が見えており、ここからもその市場における流通——文書の性格からしてかなり恆常的な——が確認されるのである。さらに敦煌文書では、鐘の鑄造の材料として寺院に「鐵二斤」が獻納されている例が見えており、⁽³⁰⁾——この獻納者の階層については明らかではないものの、本文書中での各人の獻納の内容はいずれもさして豊かなものではなく——かなり廣範な階層に鐵素材流通の浸透していることがうかがわれるであろう。

次に鐵素材の貯藏の例について見てみると、『宋書』卷九五索虜傳に、元嘉二七(四五〇)年の北伐に際して陷落した北魏濟州碭磈城での戰利品として、奴婢や家畜とともに「鐵三萬斤、大小鐵器九千餘口」とあり、前線地帯での例ではあるが、當時の城市に大量の鐵素材が貯藏されていたことを知ることができる。また吐魯番文書中、七世紀中葉の一寺院の物品目錄に「同(銅)鐵拾□斤半」と見え、さらに敦煌文書でも、咸通十四(八七三)年の紀年をもつ寺院のやはり物品目錄⁽³¹⁾に、「一般的項目として「鑠鐵銅鐵」、實際の保有狀況として「銅鐵各壹斤子」とあり、他の同様な文書にも「生鐵壹拾伍斤」などの例が多く見られており、一般村落のレベルでも、寺院程度の經營體には鐵素材の貯藏のなされていたことが

示されている。

以上、鐵素材の流通と貯藏について、それぞれ二、三の實例から見てきたが、とくに吐魯番・敦煌文書の例からは、それらが一般村落レベルにまで浸透していたことが確認されたものと思われる。それではこのことが實際に、一般村落レベルでの鐵製農具の生産に結びついていたのか、この點について次に見てみることにしたい。

(2) 鐵素材の搬入による非鑛產地での鐵製農具の生産

まず九世紀初、敦煌での家産分割をめぐる裁判關係文書の中に、

齊周が柔遠に穀物を運送するやくめで派遣された時、かえりに生鐵と熟鐵二〇〇斤ばかりと車の釧七箇を入手し、ここごとく家中に入れて使った。うち鐵三〇斤は^{じふのうち}當家のこわれた釜と鐵をつくろい八斗釜一箇をつくるのにあてた。その手功の麥十石は裴俊の所で取って王榮にわたした。⁽³⁴⁾

という記事があり、鐵素材の搬入、貯藏、そしてそれを利用した鐵器製作の實例を見ることが出来る。搬入された鐵素材が家に貯藏されていることからすると、専門の鑄物職人であると考えられる王榮の場合も含めて、この鐵素材を利用した鐵器製作は、この齊周の家のごく身近な範圍において行われたものと思われる。なお、前節に引いた鐵素材貯藏の事例についても、これと同様のことを指摘することが出来るであろう。そして吐蕃占領期、八世紀末の「沙州僧俗啓狀集」にさらに鐵を支給いただき、遠く敦煌までお送り下さいましたおかげで、農具は不足なく、耕地も廣くなりました。⁽³⁵⁾とあることより、本稿で問題とする農具生産についても、こうした狀況が確認されるのである。

これらは八、九世紀の敦煌の事例であったが、『晉書』卷五七陶瑱傳に、三國吳の時のこととして、

滕脩はしばしば南賊を攻撃したが、勝つことができなかった。瑒が「南岸ではこちらからの鹽鐵の供給に依存しているから、交易を停止して供給を止めてしまえば、（南岸では武器を）鑄つづけて農具生産に回すでしょう。二年もこ

れを續ければ、一戦でかたがつきます」と言い、脩がその通りにしたところ、果たして賊を破ることができた。⁽³⁶⁾

とあるのは、まさにここまでに見てきた「鐵素材の搬入による非鑛產地での鐵製農具の生産」を示すものであろう。そしてさらに注目されるのは、六朝期の志怪小説である『搜神記』史妲の話の中に、漢代、陳留郡考城縣の住民が船で約二百五十キロほど下流の下邳に鋤を賣りに行くくだりが見られることである。⁽³⁷⁾史料の性格上、そこでの話が現實のものであるとは考えられないものの、反面、そこに當時の社會の現實がかなりな程度反映されていることもまた事實であらう。そこでこの記事において問題となるのは、彼らが鋤を賣りに行った先の下邳が鑛產地もしくはその近邊にあったものと考えられる⁽³⁸⁾のに對して、一方の考城縣にはとくに鑛產地との關係が見られないということである。すなわちここでは「非鑛產地より鑛產地に」鐵製農具が持ち込まれている例が見られるのであり、これは「鑛產地に生産の場合が限定」されていた時期には考えられない現象である。ちなみにここに出てくる「考城」とは後漢章帝期以後の地名であり、したがってこのことからすれば、以上に見てきたような、非鑛產地での鐵製農具の生産が可能であるような生産・流通構造の存在を、最大の時期にまでさかのぼって想定することができであらう。

以上、後漢期以降における鐵製農具の生産と流通の様相について、この時期、鐵素材の廣範な流通のもと、非鑛產地の一般村落のレベルでも鐵製農具の鑄造が行われていたことを檢證してきた。『宋書』卷四五劉道濟傳には、益州でのこととして、

役所ではさらに製鐵所を立てて、民間での鑄造をすべて禁じた上で鐵器を高く賣りつけたため、買い出しに來た商人たちは嘆き、民衆はみな反亂を起こすことを思った。⁽³⁹⁾

ことを傳えているが、鐵器鑄造の禁壓がこれだけの大きな不満を引き起こしていることから、このような生産がいかに社會に根強く定着していたかがうかがわれるであらう。『魏書』卷一一〇食貨志に「それ鐵を鑄て農器、兵刃を爲るは、在所に之あり」とある如く、鐵製農具の生産は、もはや鑛產地に制約されることなく、いたる所で廣範に行われるようにな

ったのである。このような状況のもとでは、鐵製農具の自給性や重要性について意識されることはほとんどなくなり、また民間の大製鐵業者や鐵專賣制が存在する餘地もないであろう。第二章でみたような、後漢期以降の鐵製農具をめぐる諸状況の變化の背景には、このような生産・流通構造の變化があつたのである。

五 終 章

以上、本稿では、後漢期以降、鐵製農具の生産・流通構造に何らかの變化があつたとの見通しのもと、戰國前漢期と後漢期以降それぞれの時期におけるその様相について検討を加えてきた。その結果として、戰國前漢期においては、その生産が鑛産地に限定されていたために一般村落では鐵製農具を自給することができず、その供給を完全に外部に依存していたのに對して、後漢期以降は、鐵素材の流通を媒介に、鑛産地での採鑛・製鍊から鐵器製作が分離するような分業化の全面的な展開によつて、非鑛産地の一般村落レベルでも農具生産が行われるようになっていたことが明らかになつたものと思われる。この點で鐵器は、基本的にその生産過程全般が産地と分かちがたく結びついている鹽の場合とは異なつた展開を見せることとなつたのである。このような鐵製農具の生産・流通構造の變化は、農具の多様化など様々な影響をもたらしたものと考えられるが、ここでは最後に、その社會や國家支配のあり方との關係について簡単に言及して、本論をしめくくることとしたい。

筆者はかつて、漢代の農具鍛造の問題から、小農民經營を支える鐵製農具の供給が一般村落の枠内では不可能であるために、彼らの再生産を保證するための從來の共同體的機能の相當部分が村落レベルを超えて「より廣範かつ高次のレベル」に吸い上げられることとなり、そこに集權的國家形成の重要な契機の一つがあつたのではないかとの理解を提示した。⁽⁴⁰⁾ここまでの考察からすれば、そこで検討を留保していた「農具鑄造」の問題についても、こうした見解は有效なものであるといえるであろう。このように、戰國前漢期における鐵製農具の生産・流通構造のもとでは、一般村落のレベルを突き

抜けて直接に個々の小農民經營の再生産過程の一部にまで關與するような、強力な國家支配が展開していたのである。

これに對して後漢期以降は——この時期も依然として採鑛や製鍊といった作業は鑛産地に限定して行われてはいるものの——鐵素材の流通と貯藏とによつて、事實上「一般村落レベルでの農具自給」が實現しており、したがつてこの點での、國家の社會に對する支配は大きく後退した。その一方で、こうした生産・流通構造の變化は、一般村落レベルでの自給性を全體として高めたのであるが、それはさらにその内部の構造にも影響を及ぼすものであった。すなわち一般村落レベルでの自給性が高まり、比較的狭い範圍での「閉じた」經濟圏が形成されることで、「豪族」あるいは「大土地所有者」などの、いわゆる「在地の有力者」たち——彼らは鐵素材を貯藏したり、鐵器の生産を行うこともあつたが——のそこでの重要性が相對的に増大することとなり、周圍の小農民たちに對しても、それまでより以上に強い影響力が行使されるようになってゆくのである。このように、後漢期以降の鐵製農具の生産・流通構造の變化は、國家支配の後退、一般村落レベルでの經濟的な完結性の増大、そして「在地の有力者」層の影響力の強化など、當時の社會や國家支配に對して、いわば「遠心的」な作用を及ぼすものであつたと考えられるのである。

註

(1) たとえば渡邊信一郎「古代中國における小農民經營の形成

——古代國家形成論の前進のために——」『歴史評論』第三

四四號、一九七八年。のち『中國古代社會論』、青木書店、

一九八六年、に所收)に代表されるような鐵製農具の普及に

よる小農民經營の析出、という通説に對して、五井直弘「鐵

器牛耕考」(『三上次男博士喜壽記念論文集』、歴史編、平凡

社、一九八五年)では、鐵器の出土例の分析より疑義を呈し

ている。もっともこの五井論文についても、墓葬や住居遺址

などでの出土狀況からその「使用」の狀況や影響を論ずるこ

との有効性、あるいは本稿でも引用するような文獻史料との

關連など、なお検討を要する點は少なくないものと思われる。

(2) 影山剛「前漢鹽鐵專賣制の一考察——特に鐵器の生産過程

を中心として——」『岡山史學』第一〇號、一九六一年。の

ち『中國古代の商工業と專賣制』、東京大學出版會、一九八

四年、に第VI章として所收)、同「中國古代の商業と商人」

『古代史講座』第九卷、學生社、一九六三年。のち前掲書に

- 第Ⅰ章として所收) 参照。
- (3) 大槲敦弘「漢代の鐵專賣と鐵器生産——『徐偃矯制』事件より見た——」(『東方學』第七八輯、一九八九年) 参照。
- (4) 前掲(3)註、拙稿参照。
- (5) 『洛陽伽藍記』卷四に「有劉寶者、最爲富室。州郡都會之處、皆立一宅、各養馬一疋、至於鹽粟貴賤、市價高下、所在一例」とある。
- (6) 『梁書』卷一八康絢傳の「引東西二冶鐵器、大則釜鬲、小則銀鋤、數千萬斤、沉于堰所」など。
- (7) たとえば建武年間のことではあるが、『後漢書』傳六六衛颯傳に「耒陽縣出鐵石、佗郡民庶常依因聚會、私爲冶鑄、遂招來亡命、多致姦盜。颯乃上起鐵官、罷斥私鑄」とあるなど。
- (8) 影山剛「後漢朝の鹽政に關する一、二の問題」(『山本博士還曆記念東洋史論叢』、山川出版社、一九七二年。のち前掲書に第Ⅶ章として所收) 参照。
- (9) これらの時期の鹽政については、佐伯富『中國鹽政史の研究』(法律文化社、一九八七年)第二章、鹽と中國古代文明、第三章、中世における鹽政、を参照。
- (10) 日野開三郎『日野開三郎東洋史學論集』第二卷・五代史の基調(三一書房、一九八〇年)第一部第二章、同「北宋時代における銅・鐵の產出額について」(『東洋學報』第二二卷第一號、一九三五年。のち『日野開三郎東洋史學論集』第六卷、一九八三年、に第二部第二章として所收) 参照。
- (11) 原文では「土」は「生」に作る。王利器『鹽鐵論校注』に従つて改める。
- (12) 原文では「田」は「日」に作る。『漢書補注』に引く錢大昭の説に従つて改める。
- (13) 『漢書』卷二四食貨志下に「此六者、非編戶齊民所能家作、必印於市、雖貴數倍、不得不買。豪民富賈、即要貧弱」とある。
- (14) 『顏氏家訓』治家第五に「至能守其業者、閉門而爲生之具以足、但家無鹽井耳」とある。
- (15) 『晉書』卷九四郭文傳。
- (16) 『史記』卷一二九貨殖列傳。
- (17) 『鹽鐵論』復古第六。
- (18) 同右、禁耕第五。
- (19) 潮見浩「漢代における製鐵遺跡とその技術的問題」(『たたら研究』第七號、一九六一年) 参照。
- (20) 佐藤武敏「漢代における鐵の生産——とくに製鐵遺蹟を中心——」(『人文研究』第一五卷第五號、一九六四年) 参照。
- (21) 井口喜晴「漢代の製鐵遺跡について」(たたら研究會『日本製鐵史論』同會、一九七〇年) 参照。
- (22) 潮見浩『東アジアの初期鐵器文化』(吉川弘文館、一九八二年)第一章第三節、鐵器の普及と製鐵遺跡、参照。
- (23) 佐原康夫「漢代の製鐵技術について」(『古史春秋』第六號、一九九〇年) 参照。
- (24) 31安國城の鐵素材の欄に(鑄型)とあるのは、これが原料用である、という報告での見解による。なお、報告の欄での略稱は次の通りである。考Ⅱ『考古』(『考古通訊』を含む)。

學』『考古學報』、華Ⅱ『華夏考古』、文Ⅱ『文物』(『文物參考資料』を含む)、中Ⅱ『中原文物』、集Ⅱ『考古學集刊』、叢Ⅱ『文物資料叢刊』、與Ⅱ『考古與文物』。また、30溫縣城の報告は、文Ⅲのおよび『漢代疊鑄——溫縣烘範窯的發掘和研究——』(文物出版社、一九七八年、北京)参照。

(25) 『考古學集刊』第二集、一九八二年、八二頁。

(26) 『史記』卷三〇平準書に「敢私鑄鐵器煮鹽者、鈇左趾、沒入其器物」とある。

(27) 『漢書』卷二四食貨志下に「元帝時嘗罷鹽鐵官、三年而復之」とある。

(28) 72 T. A. M 151: 101, 國家文物局古文獻研究室・新疆維吾爾自治區博物館・武漢大學歷史系編『吐魯番出土文書』第四冊(文物出版社、一九八三年、北京)一九二頁。なお、吐魯番・敦煌文書の引用に当たっては、東京大學東洋文化研究所教授池田溫氏より多くの御教示を賜わった。

(29) 大谷三〇五三、三四四四號文書。池田溫『中國古代籍帳研究——概観・録文——』(東京大學出版會、一九七九年、以下、『籍帳』)四五二頁。原文は、

銅壹兩 上直錢玖文

〔次〕

鎔壹兩 上直錢參拾柒文

〔次〕

下參拾

〔次〕

なおこの文書については、同『中國古代物價の一考察——天寶元年交河郡市估案斷片を中心として——』(『史學雜誌』第七七編第一、二號、一九六八年)参照。

(30) ペリオ第二八六三號文書。劉復『敦煌掇瑣』中輯(史語所專刊一二、一九三四年、北京)八二、三三三—三五頁。原文は、

紅花一斤、鐵二斤。施入寫鐘。

右所施意者、爲合家大小報願平安、今投道場、請爲念誦。

正月一日、弟子无名疏。

(31) 64 T. A. M. 15: 18『唐雜物性畜帳』(『吐魯番出土文書』第四冊、六〇—一頁)。

(32) ペリオ第二六一三號文書。

(33) ペリオ第三一六一號文書。

(34) ペリオ第三七七四號文書。『籍帳』五三九—四二頁。原文は、

一齊周差使、向柔遠送糧。却廻得生鐵・熟鐵二百斤已來、車釧七隻、盡入家中使。內卅斤、貼當家破釜鐵、寫得八斛釜一口。手功麥十石、於裴俊處取付王榮。

なお、所掲の現代語譯は、池田溫『丑年十二月僧龍藏牒——九世紀初敦煌の家産分割をめぐる訴訟文書の紹介——』(『山本博士還曆記念東洋史論叢』、山川出版社、一九七二年)による。

(35) スタイン第一四三八號文書背五。原文は
更蒙支鐵、遠送敦煌。耕農具既多、耕自廣。

(36) 原文は「脩脩數討南賊、不能制、瑠曰、『南岸仰吾鹽鐵、斷勿與市、皆壞爲田器。如此二年、可一戰而滅也。』脩從之、果破賊。」

(37) 原文は「漢陳留考城史姁……後與鄉船至下邳賣鋤、不時售。」

(38) 下邳は、『漢書』卷二八地理志上には「有鐵官」、『續漢書』

卷二一郡國志には「有鐵」とある。

(39) 原文は「府又立治、一斷民私鼓鑄、而貴賣鐵器、商旅吁嗟、百姓咸欲爲亂。」

(40) 前掲(3)註、拙稿参照。

(41) たとえば先に引いた吐魯番・敦煌における寺院や、「齊周」

の例など。

(42) 宮崎市定「中國における村制の成立」(『東洋史研究』第一八卷第四號、一九六〇年。のち『宮崎市定アジア史論考』中巻、朝日新聞社、一九七六年、に所收)では、莊園が時には採鑛冶金をも行ったことを指摘する。

PRODUCTION AND CIRCULATION OF IRON FARM IMPLEMENTS IN ANCIENT CHINA

OHKUSHI Atsuhiko

In this article, I examine the state of production and circulation of iron farm implements in the former imperial era with supposing that there would have been some change between the period from the Warring States down to Former Han and that from Later Han onward. Then the conclusion is as follows.

In the Warring States and the Former Han period, they could not produce iron farm implements in villages and depended on other regions entirely for supply of them, because production of them was limited to regions rich in mineral deposits. On the other hand, since the Later Han period they came to produce farm implements at the level of general villages which were not rich in mineral deposits, because of such overall development of division of labor as the production of ironwares separated from mining and iron manufacturing in the regions rich in mineral deposits through the circulation of ingot. This change of the structure of production and circulation of iron farm implements also had great influence on society and state control.

MAN WEN YÜAN TANG 滿文原檔 AND HUANG TZU TANG 黃字檔 —examination of its amendment—

HOSOYA Yoshio

Man Wen Lao Tang 滿文老檔, which is materials on the history of the early Ching period, is the compilation of Man Wen Yüan Tang 滿